

心に響くリフレインの歌

山下 佐保

短歌に限らずさまざまな詩型においてリフレインの技法は多用されている。同じ言葉やフレーズを繰り返すことで意味合いを強めたり、リズムや気分を生み出したり、感情の高揚をあらわしたりなど、多くの効果がある。短歌においても、歌全体のリズムや調べが整い、読んだときに読者の胸に滑らかに音が響いて印象を残す。長く愛唱される短歌にはリフレインの歌も多い。例えば与謝野晶子の「ああ皁月仏蘭西の野は火の色す君も雛罌栗われも雛罌栗」や北原白秋の「ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の大ききあり小さきあり小さきあり大ききあり」など。リフレインの歌を挙げようとする回数限りなくあるのだが、ここでは現在六十代の円熟した女性歌人の平成期の歌集に限定して歌を取り上げ、いくつかの型に分類しながら考察してみたい。

1 形容詞のリフレイン

夫の亡きこの世にわれの居る不思議花水木
あかくあかく色づく 松尾 祥子『月と海』
雨止みて初夏のあかるさ村ぢゆうの水張田
しろくしろくさざめく

朝比奈美子『水の祈り』

形容詞、ことに色彩に関する言葉のリフレインは数多い。一首目、夫を亡くしたばかりの作者は花水木の赤を切実な生の実感ととらえる。作者の心の痛みがリフレインによって強調され、悲しい「あか」の色が読者に直接に伝わってくる。二首目は、リフレインによって「村ぢゆう」の光る田がいつせいにさざめく様子が鮮やかに描写されている。

純白の水着たたみてリュックへと詰めたる
とほきとほき夏あり

栗木 京子『けむり水晶』

写真店の奥に垂れあるネガフィルム 時間
は長き長き舌もつ 同

「遠し」「長し」は、ここではいずれも時間のはるけさを歌ったものである。一首目、作者にとつて若き日へのまぶしい感慨は現在との隔たりを感じるものとしてとらえられる。二首目の「ネガフィルム」には失われた時代そのものが可視化され、追憶の深い感慨とも重なっている。

2 印象的な言葉のリフレイン

独特な音韻を持つ言葉は、リフレインによってさらに効果的に歌にリズムをもたらしてくれる。

トントんミートントントんミ―は可愛ゆき名慣
れて呼ばなくなれど可愛ゆし

米川千嘉子『滝と流星』

パーキンソンパーキンソンと病名を遊園め
ぐるやうに言ふ父 小島ゆかり『泥と青葉』

一首目、「トントんミ―」とは沖縄方言で「ミナミトビハ
ゼ」のことだという。リズムカルな言葉の繰り返しは思わず
口に出したくなってしまう。二首目、「パーキンソン病」は
深刻な病気であるが、音の響きのもつ明るさとそれとのギャ
ップに作者は着眼しており、ここではどこか悲哀の表情も醸
し出している。

3 序詞的なリフレイン

言葉のリフレインが自然に作品の意味世界の導入になつて
いる歌がある。これを仮に序詞的なリフレインとする。

ふるさとの街路樹あはくそよぎをりねむの
木ねむの木ねむたくなりぬ

田中 愛子『傘に添ふ』

成り成りて成り余りたる雲ふたつ動くとも
せず葉桜の上 栗木 京子『けむり水晶』

一首目は「ねむの木」から「ねむたくなりぬ」までのなだ
らかなつながりや結句に向かつて速度がゆるんでいく感じが
心地良い。二首目は、「成り余りたる雲」に続くまでにむく
むくと空に雲が湧くさまが想像されて豊かな印象をもたらし
ている。

4 言葉の並列による対句的リフレイン

ある言葉が異なる修飾部によつて並列・対比されて言葉の
意味を深めていき、同時に対句表現にもなっているリフレイ
ンがある。まずは名詞の例を挙げる。

「いつまでひとりで」とつぶやいたのは母
のこゑわたくしのこと水水仙のこゑ

米川千嘉子『牡丹の伯母』

泣くをみな怒れるをみなより恐し真夜にひ
とりで笑へるをみな 田中 愛子『傘に添ふ』

一首目、つぶやいた声の主を問いなから、「水仙」に行き
着くところに詩情がある。二首目は、女性の感情の恐さを表
現し、妙に説得力のある歌である。

次に動詞、形容詞、その他の言葉の例を挙げる。

冬雲に折れて樺の葉に折れて君の手に折れ
て吾あに来る光 栗木 京子『水仙の章』

短歌すこし職業すこし主婦すこし人間すこ
し 秋の深空 田中 愛子『傘に添ふ』

鳥のための人のための毒ガスのための 穴
ほりてくらく埋めきしかな

米川千嘉子『滝と流星』

一首目、光が屈折していく経路を「折れて」という言葉で
つなぎ、「吾」に届くまでの展開が見事である。二首目、自
己をユーモラスに見つめた歌であるが、「すこし」という控
えめな表現が「秋の深空」と対比されて効果的である。三首
目は鳥インフルエンザを扱った歌だが、「くための」のリフ

レインによって「穴」の意味が懐疑的にとらえられ不気味な印象を与えている。

5 生々流転型リフレイン

月日の経過や植物の盛衰を描きながら、リフレインによって生々流転の理を表現しているような歌を挙げる。

昼、夜、昼、夜、夜、昼、夜と縞なせる時間をくぐり来て五十歳 田宮 朋子『星の供花』

月が虧け盈ちゆきて虧けまた盈ちて君のいまさぬふた月が過ぐ 同

紅牡丹開きて閉ぢてまた開き開ききりたる果てに散りそむ 田宮 朋子『雪月の家』

一首目、昼から夜、夜から昼と輪のように繋がった規則的な時の中で歳を重ねてきたことをしみじみと詠嘆する。二首目は「君」の不在をかこつ月日の長さを月の満ち欠けで表して美しい。三首目は、牡丹の開花から落花までをいねいに描き、ゆつたりとしたものあわれを感じさせる歌である。田宮作品が持つ仏教との関わりが感じられるリフレインであると思う。

6 なぞかけ対句のリフレイン

同じようなフレーズを繰り返して対比させ、全体として「なぞかけ」のようにも見えるリフレインの例を挙げる。

起き上がりたくてもできぬその日まで起き上がりたくなくても起きる

小島ゆかり『泥と青葉』

その親の時間を食べて生ひし子の時間を食

べて老いるその親
かぜのなかをあそぶとんぼの数ふえてとんぼのなかをふくかぜになる 同

小島ゆかり『馬上』

一首目、誰しもが抱える死までの生の時間を簡易な言葉で表現して納得させる。リフレインによって「起き上がる」との意味を深くさせている。二首目、子育てと介護が順に巡ってくるという、これも人間の当たり前の生の営みであるが、時間を「食べる」という表現は象徴的で本質的である。三首目では、「とんぼ」と「かぜ」もまた逆転する。自在に視座を変える緻密な表現もまた、小島作品の特徴を表したリフレインといえよう。

7 反芻・確認型リフレイン

ある言葉を自らの中で反芻し、確かめていくようなリフレインの例を挙げる。

青春の挫折ひとつを子のうへに見て思ふ

十年、十年待たう 朝比奈美子『水の祈り』

君をらぬこの世に今日も過ごししを丸としてひと日ひと日生き継ぐ

松尾 祥子『月と海』

一首目、子の挫折を見る母の心情が「十年」待つ、と自らに言い聞かせるように繰り返されている。二首目、夫を亡くした作者が一日一日を噛みしめるように過ごしている様がない。

8 擬態語のリフレイン

そもそも擬態語は「さらさら」「しんしん」のように繰り返す表現が多いのだが、さらに八音のリフレインになっていく歌を挙げる。

母の部屋出でて駆へとあゆむ道ちちほぼち
ちほぼ虫飛びてをり 栗木 京子『水仙の章』
ぶだうぼろぼろぼろぼろこぼれ東北の膨大
なかなしみをどうする

小島ゆかり『泥と青葉』

一首目、「ちちほぼ」は松本たかしの俳句「チチポポと鼓打たうよ花月夜」を想起させるが、作者は鼓の音でなく虫の飛ぶさまを形容した。虫のぎこちないうごきと作者の複雑な心情が相まってリズムカルなりフレインを形成している。二首目、リフレインによって葡萄が際限なくこぼれていく様子に「膨大なかなしみ」を映像化する。これは「ぼろぼろ」四音では足りないのである。

9 悲しみのリフレイン

悲しみや苦悩、怒りの強さなどを表現するときリフレインが使われるのも必定である。

打ち切られまた打ち切られ悲しみはあきら
めの皮膜まとひゆくのか

栗木 京子『水仙の章』

この人の母になりたし「もういいよ」抱き
ていくたびもいくたびも言ふ

松尾 祥子『月と海』

子を思ひかなしみあれば外に出でてひたす

らひたすら歩く野の道

朝比奈美子『水の祈り』

二人子を亡くした母がわたしならいりませ
ん絆とかいりません 小島ゆかり『泥と青葉』
やはらかき甘藍かんらんの扉をひらいてもひらいて
もひらいても父あらず 大野 英子『甘藍の扉』

一首目、東日本震災後の不明者捜索活動打ち切りに際した歌。打ち切りの非情さと諦めきれない遺族の悲しみが思われる。二首目、病を抱えた夫に作者は「いくたびも」も励ますが届かない。「母になりたし」がその切実さを覆う。三首目、子の悲しみと自分の悲しみの二つを抱えて歩くしかない作者の心情が「ひたすら」ににじむ。四首目も東日本震災の時の歌である。「絆」という耳障りのよい言葉にごまかさず、子を失った母親の悲しみが怒りを伴ってきつぱりと代弁されている。五首目、父を亡くした作者が父の好物だったトンカツに添えるキャベツの葉を剥く場面。「ひらいても」が三度も繰り返されているところに、父恋いの強さ、喪失感が伝わり胸に迫る。

まとめ

わずか三十一音しかない短歌という詩型の中で同じ言葉を二度三度繰り返すことは、ある意味非効率であるといえる。しかし、やはり繰り返さずにはいられないところに歌を詠む人の必然があるのだと思う。そうした切実な思いに出会ったとき、リフレインは読者の心にも効果的に響いてくるのだろう。